

総合博物館における分野融合展示・コラボ企画の試み —考古分野からのアプローチ例—

美濃口紀子

1 総合博物館に関する近年の統計データ

熊本博物館は、市立の総合博物館である。平成24年度の統計（註1）によれば、全国の「博物館」の数は4105館、このうち「総合博物館」の数は171館で、その割合はわずか4%と大変少ない（註2）。また、熊本県内の博物館数は41館であるが、このうち総合博物館は、わずかに当館のみである（註3）。

また別の統計（註4）によれば、総合博物館の設立年代は「1950年代以前は27館、60年代は11館、70年代は29館、80年代は49館、90年代は8館」である。現在、設立数は減少傾向で、「人文系博物館」「美術館」「自然系博物館」がいずれも増加傾向にあるのとは対照的である。これは、時代とともに博物館が専門分野に分化してきた結果を示している。

2 熊本博物館の場合

当館の場合、昭和27年（1952）の開館当初から一貫して自然・人文両分野の展示を行っており、さらに昭和53年（1978）の新館オープンによりプラネタリウムを併設した博物館となった。熊本には県立博物館がないこともあって、市立博物館でありながら、県内全域を展示紹介する役割も担ってきた。

さらに現在では、自然分野として地質・動物・植物・理工科学・天文（プラネタリウム）が、人文分野として考古・歴史・民俗・美術工芸、さらに保存科学の計10分野があり、各分野1名ずつ学芸員（または研究員）が日々の業務に取り組んでいる。

3 総合博物館の分野融合・コラボ企画の難しさ

他館の学芸員からは「多分野の専門家が一堂に揃っていて良いですね」などと言われることも多い。しかし、展示会等の業務は各担当者が個々に企画・立案して開催する場合がほとんどであり、協力できたとしても隣接分野（考古+歴史、動物+植物など）がせいぜいで、「自然と人文の融合」「総力を結集した」「総合博物館ならでは」と言えるような分野融合展示・コラボ企画を実現するのは案外難しいものだと、日頃から感じている。実際、従来の「常設展示」は、1階に自然分野、2階に人文分野

という配置で、分野ごとに展示室が分かれていたこともあって、総合博物館でありながらも分野融合展示は実現できていなかった。

これに対して『熊本博物館リニューアル基本構想・基本計画』（平成24年）では、常設展示の展示構成のポイントとして「分野融合」をあげており、「学芸員の研究内容にもとづきながら、各分野を連携・融合させるテーマ構成」とし、「広範囲の研究領域と開館以降60年にわたる資料の蓄積を活かし」た展示を目指すと謳っている（註5）。現在はこれに基づいてリニューアル準備を進めているところである。

一方、当館がこれまでに開催してきた「特別展」でも、例えば開館50周年記念で自然・人文の収蔵資料展を開催したり（註6）、60周年記念ではさらに踏み込んで「博物学」をテーマに据え、積極的に分野融合を試みた収蔵資料展を行うなど、すでにいくつかの実績はある（註7）。こうした過去の取り組みを振り返ってみると、固定的・長期的・概説的な「常設展示」や、特定のテーマを決めて他館からの借用資料も含めて展示構成を考える「特別展」よりも、当館所蔵の資料について各学芸員の知恵を出し合う「収蔵品展」や「企画展」の方が、当然ながら分野融合展示やコラボ企画を生み出しやすい、と言える。

4 総合博物館の中の考古分野

筆者が担当している考古分野の場合、資料の材質は土製品、石製品、骨・角・牙製品、貝製品、木製品、金属製品など多岐にわたる。日頃から自然史系の学芸員には、獣骨の同定作業などを依頼することも多く、総合博物館としてのメリットを一番感じている学芸員かも知れない。「考古資料は、文献資料のように文字を介して直接的に語りかけてくるものではなく、あくまで活用する側が目的と研究の技術や方法を持つことによって情報を得ることのできる資料である。当然、活用の前提として、資料の観察と記録の作業があり、そこでは他分野の資料との連携も必要となる」（註8）との指摘もある。これは換言すれば、考古分野は総合博物館の中であって、他分野資料との「連携」「融合」「コラボ企画」を最

も立案しやすい分野、とも言えるかも知れない。

そこで本稿では、考古分野からのアプローチ例として、当館の取組2例を紹介する。総合博物館ではどのような分野融合展示が可能なのか、効果的なコラボ企画とはどのようなものか、リニューアルオープンに向けて準備中の今、あらためて考えてみたい。

5 考古分野からのアプローチ例

例1) プラネタリウム オリジナル番組

「時代(とき)を越えて—歴史に刻まれた星々—」

平成19年度、当館では文化庁主催の巡回展「発掘された日本列島2007」を開催し、展示の目玉である武人埴輪(千葉県人形塚古墳出土)をはじめ、全国で話題となった出土品を特別展示室で陳列した。



これに併せて、プラネタリウムではオリジナル番組「時代(とき)を越えて—歴史に刻まれた星々—」を制作し、冬番組として放映した(平成19年12月8日~平成20年3月2日)。

物語は、閉館後の博物館へ忘れ物を取りに来た少年が、館外へ抜け出して星空を眺めていた武人埴輪と出会うところからスタートする。埴輪が案内役として、キトラ古墳(奈良県)の石室に描かれた星座や、妙見祭(八代市)にもうかがえる妙見信仰と北極星の関係、西南戦争後に“西郷星”と呼ばれた火星の話などを紹介し、少年が星空に関心を深めていく内容である。したがってこれは「考古+歴史+民俗+天文(プラネタリウム)」のコラボレーションであり、「総合博物館ならではの」企画だったと言える。

プラネタリウムの作画は地元のイラストレーターである岩本順子氏、埴輪の声は俳優の常田富士男氏が担当し、全体のシナリオ執筆と編集は当館のスタッフが行った。マスコミから取材で取り上げられ話題になり、また展示会との相乗効果もあったため、プラネタリウム観覧者数も例年より約25%増加した。

これに加えて、展示期間中は考古学同好会の協力で「考古体験コーナー」を開設し、スタンプラリーなども実施した。子どもたちにとってあまり馴染みがない考古の展示会も、キャラクター化した武人埴輪がプラネタリウムに登場したことで親しみやすくなり、家族連れには特に人気を博した企画であった。

例2) 企画展「稲荷山古墳の出土遺物」における

「学芸員目線で遺物を見る!」解説パネル

今年度、当館では企画展「稲荷山古墳の出土遺物

物」を開催した（平成26年12月2日～平成27年1月18日）。その展示構成は、以下のとおりである。

- 第1章 稲荷山古墳とは
- 第2章 稲荷山古墳の装身具
- 第3章 稲荷山古墳の農工具
- 第4章 稲荷山古墳の武器
- 第5章 稲荷山古墳の馬具
- 第6章 稲荷山古墳の土器
- 第7章 保存修復について



「学芸員目線で遺物を見る！」

総合博物館ならではの
コラボ企画です！

地質・動物・植物・理工・
天文・考古・歴史・民俗・美術工芸・
保存科学・・・熊本博物館は「総合博物館」
なので、自然・人文両分野の学芸員・研究員
がいます。本展では、独自の「学芸員目線」
で、出土遺物に解説を加えてみました。
少し視点を変えて観察してみると
何か発見があるかも？

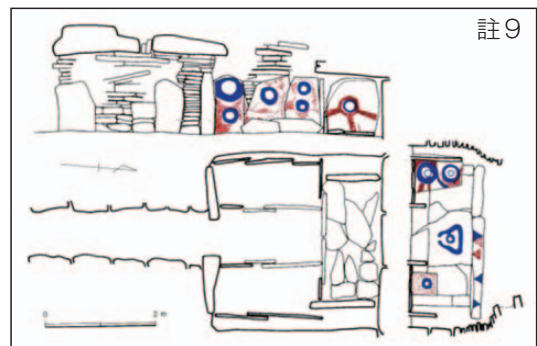
もちろん考古分野の展示会であるが、展示会場内ではコラボ企画として「学芸員目線で遺物を見る！」と銘打った解説パネルを掲示した。これは稲荷山古墳出土品に関連する「考古以外」の収蔵資料（鉱物資料・馬の骨格標本など）を併せて陳列し、各分野の学芸員に解説を加えてもらう、という試みである。その具体的な内容については、以下のとおり。

① 理工科学（第1章 稲荷山古墳とは）

「学芸員目線で遺物を見る！」

★理工担当研究員のひとこと

装飾古墳で用いられる赤色は「ベンガラ」という顔料を用いている。ベンガラ（弁柄）とは、化学的に言うと「酸化第二鉄 Fe_2O_3 」のことで、阿蘇で採取される黄土を火にかけて作ることが可能。稲荷山古墳も装飾古墳で、石室の壁面にはベンガラが塗布されていた。



註9



② 地質（第2章 稲荷山古墳の装身具）

「学芸員目線で遺物を見る！」

★地質担当学芸員のひとこと

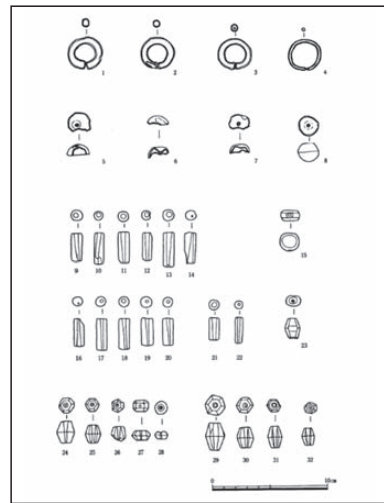
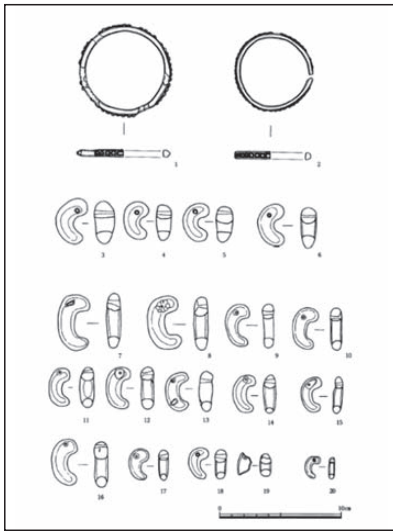
玉髓たまぐすりのなかま（瑪瑙めうと碧玉へきぎょく）
玉髓とは石英の一種で、水晶のように大きな結晶が成長したものではなく、とても小さな結晶が幾重にも組み合わさってきた鉱物です。このうち縞模様のあるものを瑪瑙といい、不純物を多く含み、緑色や赤色になるものを碧玉といいます。



「学芸員目線で遺物を見る！」
 ★地質担当学芸員のひとこと

本品とは「石英」という鉱物のうち、本来の結晶の形がはっきりしているものや透明度の高いものをいいます。石英は一般的な砂に含まれている中では一番硬い等級で、宝石の素材を選ぶには石英と同等かそれ以上に硬い鉱物にしないと砂埃で傷がついてしまい普段身につける宝石には向かないとされるほどです。それほど硬い水晶をこのように加工するのはとても労力のいる作業だったでしょう。美しく成長した水晶の結晶は六角柱の形をしているので、これらの六角形の外形はその形状を生かして加工したものかもしれません。

こんな風に削り出したのかも？



「学芸員目線で遺物を見る！」
 ★地質担当学芸員のひとこと

こはく琥珀は昔の樹木から染み出した樹脂が地中で変化したもので、このような生物によって作られた鉱物のことを有機鉱物といいます。それでも鉱物の中では柔らかい方なので比較的加工しやすかったでしょう。西洋では紀元前600年ごろギリシャのターレスが琥珀を毛皮でこすると埃が吸い付くようになるという性質を発見しました。この性質は後に静電気として知られるようになりました。




③ 民俗 (第3章 稲荷山古墳の農工具)



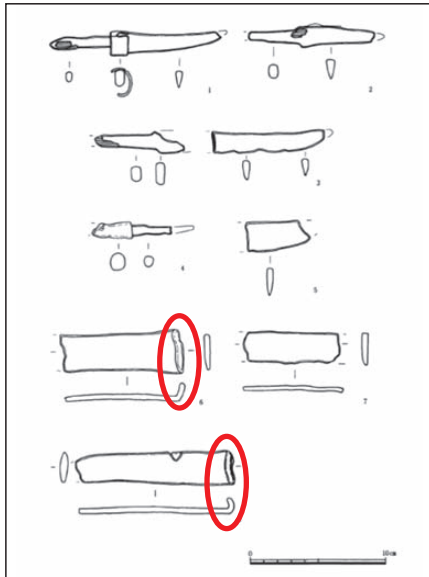
④ 植物 (第4章 稲荷山古墳の武器)

「学芸員目線で
遺物を見る!」

★民俗担当学芸員の
ひとこと



古墳時代の鎌は端部を差込み
折り曲げ、柄に固定していたので、
遺物に折り曲げがあることが「鎌」
と判断される根拠になっている。
現代の鎌では、端部を柄に差込み
目釘穴に目釘を通して木柄と刃部を
固定、口金で締めつけ留めている。



「熊本の鎌」




川尻万物職人

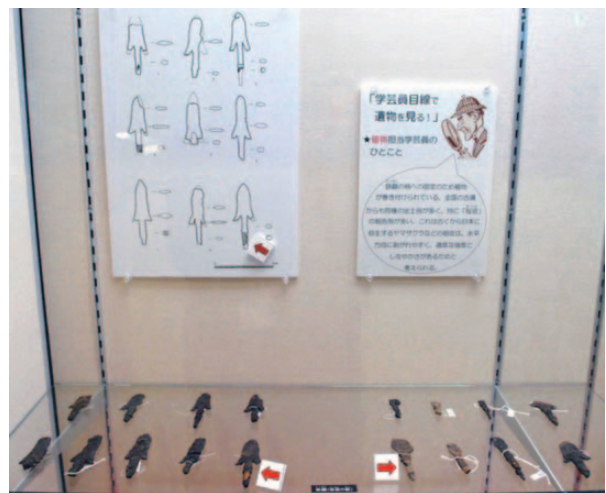
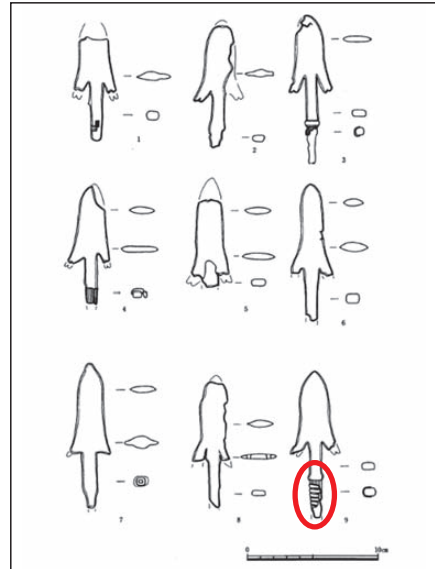
昭和 48 年頃、全国の製造本数は年間
1000 万本だとされていた。その内、12 万
6000 本が熊本で、川尻や人吉を中心に生産
していた。その当時は、「野鍛冶」と呼ばれる
村々を回ったり、各村に定住し、生活に関わ
る刃物を作っていた職人もいた。地域の需要
にあった鎌を作っていたが、昭和 30 年代頃
から安価な量産品や輸入品に、そのシェアを
奪われていった。

「学芸員目線で
遺物を見る!」

★植物担当学芸員の
ひとこと



てっさく
鉄製の柄への固定のため植物
が巻き付けられている。全国の古墳
からも同様の出土例が多く、特に「桜皮」
の報告例が多い。これは古くから日本に
自生するヤマザクラなどの樹皮は、水平
方向に剥がれやすく、適度な強度と
しなやかさがあるためと
考えられる。

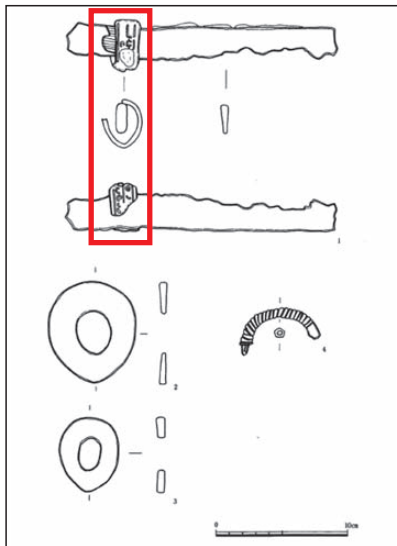


⑤ 美術工芸 (第4章 稲荷山古墳の武器)

「学芸員目線で
遺物を見る!」

★美術工芸担当
学芸員のひとこと

象嵌は、やきものや金属、
木などの表面にほかの材料をうめ
こんで文様を表現する、工芸の技法である。
象嵌の「象」はかたどる、「嵌」ははめ
こむという意味をあらわしている。
この小刀の場合は、銅金具の鉄地に
銀象嵌が施されている。

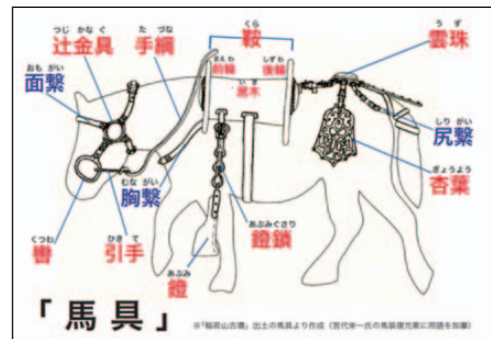


⑥ 動物 (第5章 稲荷山古墳の馬具)

「学芸員目線で
遺物を見る!」

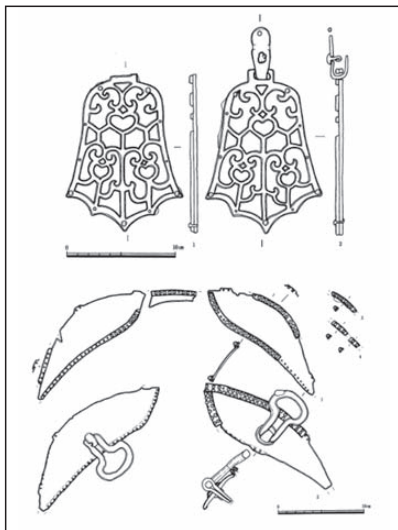
★動物担当学芸員の
ひとこと

現世馬の頭部の骨だ。前歯と
奥歯との間に大きな隙間が見られる。
馬具の轡のうち、馬の口にくわえさせる
「ハミ」の部分は、この隙間に通す仕組み。
また古墳時代の馬は、現代の私たちが
イメージするサラブレッドのような
大きな馬ではなく、小さめの
馬だった。



左 (考古): 貝製雲珠及び螺頭部 (イモガイの仲間)
右 (動物): アンボンクロザメ (奄美大島)

⑦ 歴史 (第5章 稲荷山古墳の馬具)



「学芸員目線で遺物を見る！」

★歴史担当学芸員のひとこと

写真は、肥後熊本藩第3代藩主 細川納利所用と伝えられる「竜田鞍¹⁾」で、寛永14年(1637)の製作。江戸時代の大名が用いた鞍には、このように金蒔絵などで豪華な装飾が施されていることが多い。出土品の鞍金具も本来は木質の本体があり、その前鞆と後鞆を美しく装飾するために施されたものだろう。

1) 「竜田」は龍田の誤記として知られる。金蒔絵が龍田川にちなんでした。



細川納利所用 竜田鞍 (島田美術館寄託)

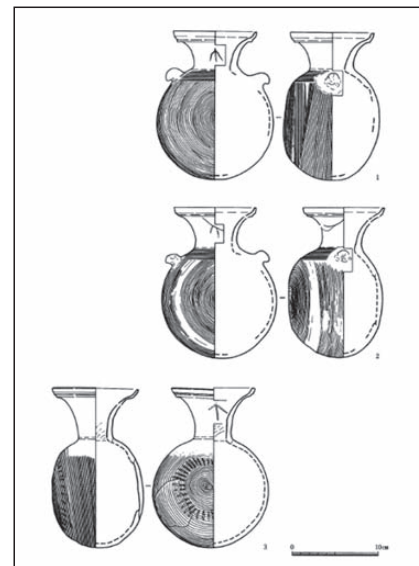


⑧ 考古 (第6章 稲荷山古墳の土器)

「学芸員目線で遺物を見る！」

★考古担当学芸員のひとこと


考古学研究には図面が欠かせません。写真では正確に伝えづらい部分(調整痕・断面形・“サビ膨れ”ではない本来の形状など)を表現するためです。発掘された考古遺物の1点1点について「実測図」を作成し、それらは報告書に掲載され、全国に向けて発信されます。こうした作業を経てようやく、全国の誰もが知り得る(利用可能な)情報になります。



⑨ 保存科学（第7章 保存修復について）

「学芸員目線で遺物を見る！」

★保存科学担当
学芸員のひとこと



なぜ鉄は錆びるのか。

鉄に発生する錆は「水分」と「空気中にある酸素」これらがセットになると発生しやすくなります。水分に溶けた鉄（鉄イオン）が酸素や水分と結びつくと、「酸化鉄」になります。これがあつまりて目に見える形になったもの、それが錆なのです。

$2Fe \rightarrow 2Fe^{2+} + 4e^-$ (鉄が鉄イオンになって電子を出す)
 $O_2 + 2H_2O + 4e^- \rightarrow 4OH^-$ (空気中の酸素が水と電子で反応して水酸化物になる)

$2Fe^{2+} + 4OH^- \rightarrow 2Fe(OH)_2$ (鉄イオンと水酸化物が反応して水酸化鉄(II)になる)

$2Fe(OH)_2 + 1/2O_2 \rightarrow Fe_2O_3 \cdot H_2O$ (水酸化鉄(II)が酸化されて赤錆になる)



以上のように、本例は考古+歴史+民俗+美術工芸+保存科学+地質+動物+植物+理工科学の9分野を巻き込んだコラボレーションであり、これも「総合博物館ならではの」企画だったと言えるだろう。

6 「学芸員目線で遺物を見る！」の効果と課題

こうしたコラボ企画の実践を通して、以下のような展示の効果があった。特に実物資料を並べて比較

した展示は、一般的に使用される参考資料（イラスト・写真など）よりも一目瞭然で、来館者にも大変好評であった。

【効果】

① 理工

装飾古墳の石室を彩色するのに使用されている赤色顔料（ベンガラ）について、化学的にも理解を深めることができる。例）酸化第二鉄：Fe₂O₃

② 地質

装身具の材料（瑪瑙・琥珀・水晶など）に使用されている石や鉱物の性質をより深く理解でき、古墳時代の人々が石材の性質を理解した上で選択・入手し、製作・加工していたことに気づく。例）水晶の結晶（六角柱）を活かして切子玉を製作するなど。

③ 民俗

古墳時代と現在の農具を見比べることで、形態の差に気づく。考古資料の場合は柄（有機質）の部分が出土していないが、民俗資料との比較により、刃部の固定方法について想定するきっかけとなる。例）古墳時代の鉄鎌は端部を折り曲げ、柄に固定。

④ 植物

金属製品の中に稀に発見される植物の痕跡について、なぜその材料が選ばれたのかを考える。例）鉄鎌を矢柄に固定するため適度な強度の桜皮を使用。

⑤ 美術工芸

古墳から出土した金属製品を通して、当時の工芸技術の確かさについて考える。例）銀象嵌の小刀。

⑥ 動物

馬の骨格標本の展示により、頭骸骨の形態を正確に理解できる。古墳時代の人々もその特徴を知った上で、馬具を製作・使用していたことがわかる。例）馬の前歯・奥歯の間の隙間に、轡のハミを通す。

⑦ 歴史

古墳時代と近世の鞍（馬具）を見比べる。考古資料の場合は居木（有機質）の部分が出土していないが、歴史資料との比較により、本来は鞍金具がどのように装着されていたか想定するきっかけとなる。

⑧ 考古

考古学研究ではなぜ図面（実測図）が必要なのか、実物と図面を並べ、矢印でポイントを示し展示。例）須恵器の調整痕やへう記号、鉄矛の断面形、（サビ膨れの状態ではなく）本来の金属製品の形状など。

⑨ 保存科学

鉄が錆びるメカニズムを知り、文化財の保存と管理には大変な手間と費用がかかることがわかる。例) 博物館の温度・湿度など保存環境が重要である。

以上のように、コラボ企画の実践を通して、多くの見学者にとっては展示資料に対する理解が深まる良い結果となった。しかし企画展会場内で来場者の感想を聞いてみると、参考資料が思わぬ勘違い・誤解を生んでしまう危険性ははらんでいるようである。今後の課題として、以下に具体例をまとめておく。

【課題】

・地質

勾玉（瑪瑙製ほか）・管玉（碧玉製ほか）・切子玉（水晶製ほか）等の装身具（古墳出土品）と一緒に、地質分野の収蔵資料（岩石・鉱物などのコレクション）を参考資料として展示しておく、「地質資料と同じ場所で採れた石」と誤解される場合がある。

・動物

馬具（古墳出土品）と一緒に、動物分野の収蔵資料（現代のばんば馬の頭蓋骨）を参考資料として展示しておく、「この馬の骨も古墳を発掘して一緒に出てきたもの?」「古墳時代の馬もこんなに体格が大きかったの?」などと誤解される場合がある。

こうした勘違いや誤解は特に、解説パネルやキャプションにあまり目を通さず、短時間で見学する来館者に多い傾向がある。実際、展示会場内の解説パネル（参考資料に関する注意書き）、キャプション（参考資料のプレートは明確に色分け）、ケース内での配置（参考資料の陳列は明確に区別）などの工夫はしていたので、上記の課題に対しては今以上に「注意書きを目立たせる」などの対処法しか思いつかない。

しかし総じてみればやはり「効果」の方が大きく、コラボ展示は有効であった、と言えるだろう。

今回は「古墳時代の出土品」を中心に据えて、他分野とのコラボを試みたものだったが、もちろん他の考古資料（旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古代・中世・近世・近代…などの出土品）に対しても応用は可能である。他分野の学芸員を巻き込み「視点」や「切り口」を変えて収蔵資料に解説を加えることは、資料の新たな価値付けや魅力発見につながり、例えば博物館で定期的で開催する「収蔵品展」

などにおいても、その内容をマンネリ化させないための有効な手段となり得るであろう。

おわりに

考古資料に限らず、人文系資料の取り扱いについては、「その資料が持っている希少性や技術の高さ、美の本質を検証する術として、多角的に資料を見る目を豊かにすることに尽きるのである。このように総合的にもものを観る目ができ上がってはじめて、本当の意味で資料や作品を取り扱えるようになるのである」との指摘もある（註10）。

冒頭でも述べたように、全国的に見ても総合博物館は今や少数派となってしまったようだ。しかし当館のような総合博物館の場合、せっかく多分野の専門家が一堂に揃っているのだから、学芸員同士が「単なる同居人」として1つ屋根の下で各自仕事をするだけではもったいない。人文系博物館や自然系博物館ではなし得ないような、「総合的」「多角的」な視点を強みとして活かし、積極的・効果的な分野融合・コラボ企画を行い、今後も「総力を結集した」総合博物館として成長・深化していきたいものである。

謝辞

企画展「稲荷山古墳の出土遺物」では、以下の参考文献から写真・実測図等を引用してパネル展示させていただきました。したがって、本稿でもこれら写真・実測図を多数、転載させていただきました。宮代栄一・林田和人の両氏には記して感謝致します。

参考文献

宮代栄一・林田和人・美濃口紀子2014「熊本市稲荷山古墳出土遺物の研究」『古文化談叢』第71集九州古文化研究会

註・引用文献

1) 公益財団法人 日本博物館協会2014「平成24年度博物館館園関連統計」『博物館研究』Vol.49 No.4 通巻550号

2) 出典は註1)に同じ。「平成24年度 博物館園数」のうち<館種別・博物館法別・設置者別博物館園数>より引用。

- 3) 出典は註1)に同じ。「平成24年度 博物館園数」のうち<都道府県別・館種別・博物館法別博物館園数>より引用。
- 4) 雄山閣出版2000「IV わが国の博物館の現状と課題」『新版・博物館学講座第3巻 現代博物館論—現状と課題—』
- 5) 熊本市教育委員会2012『熊本博物館リニューアル基本構想・基本計画』
- 6) 熊本博物館2002『開館50周年記念 収蔵資料公開展—博物館と私たちのくらし—』
- 7) 熊本博物館2012『開館60周年記念 肥後の博物学・科学技術—細川重賢の本草学から近代テクノロジーへ—』
- 8) 雄山閣出版1999「V 館種別博物館資料論」『新版・博物館学講座 第5巻 博物館資料論』
- 9) 熊本県教育委員会1984『熊本県装飾古墳総合調査報告』
- 10) 出典は註8に同じ。